

安芸十二神祇 阿刀神楽 「五刀」「荒平」「ハツ花」の演目紹介

五刀（ごとう）

舞役は1人。はじめ、右手に2本、左手にも2本の刀を持って舞います。そして、最高潮に達すると、さらにもう1本小刀を取り出し、口にくわえ、計5本の刀を身に帯びて激しく舞い回ります。しかも、小刀を口にくわえた状態で前回りをするなど、極めてアクロバティックな演技が見どころです。神に仕える武神が持つという、五刀の威力を讃える舞とされています。

荒平（あらひら）

この 荒平 は、神楽台本としては極めて古い天正16年（1588）の『荒平舞詞』に既に登載されている演目で、実に420年以上もの長き歴史を持つ舞として注目されています。登場する役は荒平大臣と太夫の2役。互いに問答を繰り返しながら展開していき、最後には荒平が持つ「死繁昌の杖」と太夫が持つ「あいかわの太刀」を交換し、荒平が「あいかわの太刀」と扇を手に舞い納めるというものです。これと同系統の演目が、出雲では 山の神、石見では 道返し という名で演じられています。

ハツ花（やつはな）

この舞は、しょもわけ（所務分け）という長い演目の一部分に当たります。この しょもわけ は、出雲の 五行、石見の 五郎の王子 や 五龍王 と同系統の演目で、四季の成り立ちと、その変わり目になぜ土用があるのかを演劇風に説明する展開となっています。そのうち、この ハツ花 は、四季それぞれを司る4人の王子（太郎・二郎・三郎・四郎）が、五郎との決戦に備えて特訓に励む場面を表した舞です。五刀と同様、アクロバティックな演技が連続し、しかもそれを4人で演じるさまは、実に「神わざ」とも言うべきダイナミズムです。